



令和7年度

【優秀作品集】

「大切な命を守る」
全国中学・高校生作文コンクール

発刊にあたつて

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）は、犯罪等によってその生命、身体、財産、権利・自由を侵害されるなどの直接的な被害を受けるだけでなく、周囲の人々から心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難など、多様かつ長期間にわたる被害に苦しんでおられます。こうした方々が再び平穏な生活を取り戻すことができるようになるためには、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深め、社会全体で犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から、全国警察では、教育委員会や民間被害者支援団体等と連携して、これから社会を担う

中学生・高校生を対象とした犯罪被害者等による講演会である「命の大切さを学ぶ教室」の開催に積極的に取り組んでおり、受講した中学・高校生が命の大切さを学び、犯罪被害者等の心情や置かれている状況を正しく理解することでの、犯罪被害者等への配慮や共感を広めることに努めています。

警察庁では、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させるとともに、教室の受講者だけに限らず、「

多くの中学生・高校生が犯罪被害者等への理解を更に深め共感を生む効果を期待する施策として大切な命を守る全
国中学・高校生作文コンクールを開催しており、今回で十五回目となります。

本コンクールの応募作品については、命の大切さを学ぶ教室を受講し、又は報道等により知ったことなどを踏

まえ、大切な命を守り、被害者を生まず誰もが安全で安心して暮らせる社会を実現することに関して、自分の考

えや意見等を表現した作品となっています。

本年度は、全国から一万三千七百四十六点もの作品の応募をいただき、その中から優秀作品を選考することができました。

本冊子は、選考された作品のうち、

- ・国務大臣・国家公安委員会委員長賞……………二点
- ・文部科学大臣賞……………二点
- ・警察庁長官賞……………六点

を受賞した作品を取りまとめたものです。

本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等はもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

令和八年一月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当）江口 有隣

審査委員講評

令和七年度「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールの優秀作品として、国務大臣・国家公安委員会委員長賞、文部科学大臣賞、警察庁長官賞を受賞された皆さん、ご受賞おめでとうございます。

このコンクールは今回で十五回目となります。本年度も全国から多くの作品が寄せられました。いずれも、犯罪被害に遭われた被害者やご家族等の心情、その置かれた状況等の理解、犯罪被害者等支援に対する意見や考え方、命の大切さをよく理解した内容となっていました。

受賞された作品の中には、「命の大切さを学ぶ教室」において、大切な家族を亡くした講師の講演を聴き、残された家族の深い悲しみに共感し、交通ルールを守ることの大切さを家族にも伝えていきたいと決意したものや、事件を報道するニュースや新聞の裏にある犯罪被害者やそのご家族、関わるたくさんの人達の人生に思いを馳せ、大切な人を失わないとができるかを考え続けていきたいという熱い思いを感じる作品もありました。

また、犯罪被害者やそのご家族の実情や心情をもつと知ることが支える第一歩になると考え、辛い想いを抱えながら講演を行う講師の想いに応えるためにも、被害者にも加害者にもならない覚悟が必要だと表現しているものや、講師による命の大切さを伝える活動を通じて命の重みを再認識し、感謝の気持ちを大切に育んでいきたいと表現している作品には心を打たれました。

さらには、当たり前のように思っていた毎日がかけがえのないものだと気づき、犯罪被害者やそのご家族に寄り添うことの大切さを訴えているものや、日々に感謝して一生懸命生きていこうと決意している作品がありました。このほか、講演の内容を家族と共に共有し、苦しい想いを抱えながら講演をしている講師の気持ちを受け止め、一日一日を大切に生きていくと決意しているもの、二次被害が被害者家族に与える影響について学んだ上で、やさしさや思いやりを大切にしていきたいと自らの行動を見つめ直している作品もありました。

他の作品には、「闇バイト等の現在の情勢に触れた上で、断る勇気を持つてほしい」という講師の言葉を受け、「犯罪のない社会づくり」に貢献していきたいという作品や、周囲からのサポートの重要性を理解し、自らも寄り添いたいと、相手を思いやる重要性を訴える作品がありました。

いずれも強い思いが伝わるすばらしい作品がありました。あらためまして、この優秀作品集が、犯罪被害者支援に対する国民の皆様のご理解とご協力につながることを祈念しております。

令和八年一月

公益財団法人犯罪被害救援基金 専務理事 田村 正博

目 次

☆中学生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・朝顔に託された命の願い

学校法人トキワ松学園トキワ松学園中学校高等学校

三年 中島 愛莉 2

【文部科学大臣賞】

- ・気をつけてね

学校法人本郷学園本郷中学校 一年 川眞田 朔

5

【警察庁長官賞】

- ・命の大切さを学ぶ教室

港区立小中一貫教育校赤坂学園赤坂中学校

八年 豊野 結衣 7

7

- ・いま、私にできること

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校

三年 山崎 愛理 9

9

- ・「いのちの学習」で学んだこと

滋賀県東近江市立能登川中学校

三年 阪田ひかり

11

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・事実の裏のかけがえのない真実

岐阜県立華陽フロンティア高等学校

二年 矢嶋 由乃

【文部科学大臣賞】

- ・感謝の種

三重県立北星高等学校

四年 杉本 実希

……

【警察庁長官賞】

- ・命の大切さを学ぶ教室

学校法人東奥学園東奥学園高等学校

二年 首藤 紗和

……

- ・犯罪被害者遺族による講演を聴いて

学校法人安房家政学院千葉県安房西高等学校

三年 長田柚里花

……

- ・命の尊さ

新潟県立新潟高等学校

二年 竹淵 壮哉

……

23

20

18

16

14

【中学生の部】

朝顔に託された命の願い

(東京都)

学校法人トキワ松学園

トキワ松学園中学校高等学校 三年

中島 愛莉なかじま あいり

事故の原因は、運転手の不注意と交通環境の不備が重なったものでした。しかし、私の心に強く残つたのは、「その子はもう二度と、家に帰ることができなかつた」という現実でした。

私たちが「いつもの朝」と何気なく過ごしている時間が、ある家族にとつては、最愛の子どもと永遠に別れる朝になつてしまつたのです。

講義では、事故の詳細だけでなく、ご遺族が背負つた深い悲しみについても語られました。その中で紹介された「けんちゃんの朝顔」のお話が、特に心に残りました。

事故で命を失つた「けんちゃん」が、生前大切に育てていた朝顔。その朝顔は夏の終わりに種を残しました。けんちゃんのご家族は、その種に「交通事故を二度と繰り返さないでほしい」という願いを込め、全国に配り始めたそうです。

いつも通りの朝。ランドセルを背負い、笑顔で登

校しようとしていた一人の小学生が、突然、命を奪われました。そのあまりにも理不尽な出来事を前に、私は言葉を失いました。

「同じ悲しみを、他の誰にも味わつてほしくない」その想いとともに広がつた小さな朝顔の種は、今、命の尊さや交通安全の大切さを伝える「生きた

メッセージ」として、多くの人々の心を揺さぶり続けています。私はこの話を聞いて、けんちゃんの命

は失われたけれど、その想いは今も人々の中で生き続けているのだと感じ、胸が熱くなりました。

私はこれまで、「交通安全は大切なこと」と分かってはいても、どこか遠い世界の出来事のように思つていました。けれどもこの講義を通して、交通事故はいつ、誰の身にも起こりうる、すぐ隣にある現実なのだとということを痛感しました。

運転していた人も、事故を起こすつもりはなかつたはずです。しかし、たった一瞬の不注意が、大切な命を奪い、残された人の人生を大きく変えてしまう。その事実の重さを、私は改めて受け止めました。

私の父は毎日車で通勤しています。弟はまだ小学

生で、登下校の道中に危険な場面に出会うこともあります。だから私は、今回の講義で学んだことを家族にも伝えようと思いました。

「車を運転するときは、スマホを見たり、急いだ

りしないで」

「道路を渡るときは、必ず左右を確認してね」

そう、何度も伝えたいです。

私たちも、やがては運転する立場になります。だからこそ今のうちから、「命を預かる責任が運転にはある」という意識を、しっかりと持つておく必要があると思います。

そして、運転する人だけでなく、歩行者である私たち自身にも、自分の命を守る責任があるのでいつもとも、忘れてはいけません。

信号を守ること。スマホを見ながら歩かないこと。自転車に乗るときにはヘルメットを着用すること。どれも小さな行動かもしれません、その一つひとつが、命を守るために大切な「種」だと思うのです。

命は、何よりも尊いものです。どれだけ謝罪や補償があつたとしても、一度失われた命は二度と戻つてきません。だからこそ、毎日の暮らしの中で「安全に気を配る意識」を持ち続けることが、未来の事

故を防ぐ第一歩になるのだと思います。

今回の講義は、私にとって「命を考える大切なきっかけ」となりました。

けんちゃんの朝顔の種のように、小さな行動が多く命を救う力になる。そのことを忘れず、私もこれから、一つずつできることを行動に移していきます。そして、将来車を運転するようになつたときには、どんな時でも「事故を絶対に起こさない」という強い決意と責任を持つて運転したいと思います。

たつた一人の命も失われることのない社会を目指して、私自身もその一員として、真剣に命と向き合っていきたいです。

気をつけてね

(東京都)

学校法人本郷学園本郷中学校 一年 川眞田 朔

とが少し分かっただ。けんちゃんもきっと二月十五日の朝、お母さんから「気をつけてね」と言われて家を出たのだと思う。そして下校の時、横断歩道の信号が青になるのを見て気をつけて歩き出したところで事故に遭つてしまつた。高田さんはどんなに trouser悲しかつたことだろうか。きっと後悔や自責の念もあり、なかなか現実を受け入れられなかつたと思う。

毎日、「気をつけてね」と言われているが正直なに気をつければよいのか分かっていない。家の前のコンビニに行く時でさえ母は気をつけるように言う。僕は人より不注意な性格なので幼い頃から数えきれないほどその言葉を聞いている。最近では、母の口グセになつてゐるだけなのか、僕のことを信用していなかののかどちらか分からなくなつてきていた。

今回、交通事故で息子さんを亡くされた高田香さんのお話を聞いて母が僕のことを信用していないのではなく、本当に心配して言つているのだというこ

母が子供のことを想う気持ちはそれほど大きく強いものなのだとということをやさしく話す高田さんの言葉から感じることができた。交通事故のニュースは普段一瞬だが被害者の方々は永く深い悲しみと向き合つてているということをはじめて知つた。このような経験をされている方は高田さんだけでなく、全國にたくさんおり、その方々の状況や心情をもつと知らなければならぬと思つた。まず知ることが被害者の方を支える第一歩になると考へる。今の僕には被害者をどのように支えていけばよいか分からぬ。でも感じたことをこうして文にすることで少し

でもだれかの支えにつながればいいと思う。また、僕たちが知ることで被害者にも加害者にもならない覺悟が必要だと思う。もし自分に明日がこなかつたら、もし家族に明日がこなかつたら、もし自分がだれかの明日をうばつてしまつたら：そんな「もし

言うようにする。そして明後日も明明後日もずっと母の「気をつけてね」が聞けるように帰つてこようと思う。

○○だつたら」を直接心に問うことを「命の大切さを学ぶ教室」で学んだと思う。高田さんはこの講演をするたびに何度も何度もけんちやんのことを思い出し、事故当時の自分の気持と向き合わなければならぬ。それには今でもなお相当な精神的な負担がかかると思う。それでも僕たちの前で笑顔で話してくれたのは犯罪被害のおそろしさではなく自分や家族、身近な人たちを大切にしてほしいということを伝えるためだと思った。

この春から、中学生になつて通学にかかる時間も距離も小学生の時よりもかなり長くなつた。母の毎朝の「気をつけてね」に僕は何と答えるのがよいか分からず「うん、いってきます」と言つてはいる。でも明日からは「うん。気をつけて行つてきます」と

命の大切さを学ぶ教室

(東京都)

港区立小中一貫教育校赤坂学園赤坂中学校八年

豊野 結衣
とよの ゆい

「命は当たり前にあるものじゃない。」

私は「命の大切さを学ぶ教室」に参加して、その言葉の意味を改めて考えるようになりました。

毎日家族や友達と過ごせること、ごはんを食べて、学校に行って、笑い合えること。そうした毎日の出来事は、当たり前のように思えて、実はとても大切で、かけがえのないものなのだと気づいたのです。

教室で特に心に残ったのは、ある御遺族の話でした。その方は、ある日突然、交通事故で息子さんを

亡くされました。しかもその事故を、自分の目の前で見てしまったというのです。「まさか、あの朝が最後になるなんて思わなかつた」「もつと声をかけておけばよかつた」その方の言葉や表情から、深い悲しみと後悔が伝わってきて、胸が締めつけられました。

私は想像しました。もし自分の家族や友達が、突然いなくなつてしまつたら。今、笑つてている友達が、明日にはいないとしたら。考えただけで涙が出了うになりました。

命は一つしかなく、失つたら戻つてきません。だからこそ、今ある命を大切にしなければならないのだと思います。けれど、私たちはそのことをつい忘れてしまいます。「また明日会える」「謝るのはあとでいいや」「本当は大好きなのに、恥ずかしくて言えない」そんなふうに、いつもと同じ日が続くことを前提に生きているのです。でも、それは奇跡のようなことなのかもしません。

御遺族の話を聞く中で、私は「自分に何ができる

か」を考えるようになりました。大きなことはできなけれど、小さなことならできます。たとえば、身近な人に「ありがとう」と伝えること。困つている人に「どうしたの?」と声をかけること。道にごみが落ちていたら拾うこと。これらは全部、「誰かを大切にする気持ち」や「安心できる社会」に近づく第一歩だと思います。

私は今、「命を大切にする社会」とは、「人を大切にする社会」だと思っています。一人一人が他の人を思いやることで、犯罪や事故はきっと少なくなります。そして、もし被害にあつた人がいたとしても、その人が孤独にならず、安心して暮らせるよう、みんなで支えることができるはずです。

当たり前の毎日が、どれだけ尊くて、かけがえのないものか。そのことを忘れずに、私はこれからも日々を大切に生きていきたいと思います。そして、命の重さや思いやりの心を、友達や家族とも分かち合つていきたいです。

いま、私にできること

(栃木県)

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校 三年

山崎 愛理

て、その命を奪われてしまったのだ。「ただいま」の言葉は永遠に聞けなくなってしまった。

私は、毎朝、おはようと両親に言い、いただきますとご飯を食べ「行ってきます」と家を出る。学校で学び友と語らい、部活が終わり家に帰つて「ただいま」と言い、おやすみの言葉で一日が終わる。その過程のすべてが日々当たり前のように紡がれ、その道筋が急に途切ることは想像もできない。

「行ってきます」「ただいま」この二つの言葉は対だと思っていた。朝、「行ってきます」と出かけて、夕方、学校が終わり、「ただいま」と家に帰る。毎日、ペアで繰り返される、日常の当たり前の風景だと思っていた。

しかし、私が学校で受講した「いのちの大切さを学ぶ教室」の被害者遺族の方は、その「当たり前の対」の片方が欠けてしまった。十九歳の娘さんは、「行ってきます」と車で仕事に出かけた後、飲酒して居眠り運転のトラックが対向車線をはみ出してき

私と五歳しか違わない娘さんには、やりたいことや叶えたい夢が多くあつただろう。そしてその隣に

は彼女を支え、見守るたくさんの人の笑顔があつたはずだ。しかし、理不尽な事故により一瞬にして光輝く未来が閉ざされてしまった。命はその人だけのものではなく、愛する両親、きょうだい、祖父母、友達などたくさんの人と繋がつているのだ。このようないい事故がもう二度と起きないよう講演活動を続ける遺族の方の思いが胸に響いた。

悲しい思いをする人を少しでも減らすために、いま、私にできること。それは、交通ルールを守り、被害者にも加害者にもならないよう十分に気を付けること。毎日の通学で使つている自転車も使い方を誤れば凶器になりかねない。ヘルメットをしつかり被り、自分も相手も傷つけないよう、常に周りをよく見て、「ながら運転」をしないなど、中学生でもできることはたくさんある。

そして、もう一つ大切なことは、毎日の日常を決して「当たり前」とは思わず、日々感謝して、精一杯生きることだ。命はいつ途切れるか分からない。それは何十年後かもしれないし、もしかすると

明日かもしれない。私の命は今まで私を支えてくれたすべての人と繋がり、分かち合っているものなのだから、与えられた命の時間を大切にし、夢を追いながら一生懸命生きていきたい。

「いのちの学習」で学んだこと

食べられなくなつたら」と考え、涙があふれそうになりました。

(滋賀県)

滋賀県東近江市立能登川中学校 三年

阪田 ひかり

—もう一度いいから愛する人の笑顔、声、温もりに触れたい—大切な息子さんを二十年前に亡くされた田中博司さんの言葉が今でも忘れられません。当時二十三歳だった息子の幹弘さんは、友人が運転する交通事故で、還らぬ人となりました。事故の原因是居眠り運転でした。

当たり前の日常が、当たり前でなくなる。想像もできなくくらいの恐怖が私を襲いました。朝起きると、ダイニングには朝食があり、姉の弁当がキッチンに並んでいる光景。「早く用意しなさい」と急がされながら、朝の準備をし、友人と登校する毎日。学校が終わり、大好きなサッカーの練習を終えると灯りのついた家に帰る日々。姉とスマホの写真を見せあいながらお菓子を食べる時間。何気ない毎日を過ごしている私にとって、田中さんの話は衝撃的で、信じられないものでした。

「遺族」という言葉は、単に残された家族という意味だけでなく、その家族の悲しみや苦しみ、後悔そして無念、様々な想いを含んでいるのだと感じました。毎日ニュースで報じられている事故の情報は、どこか遠い存在のものと思つていましたが、田中さんの言葉から、一日一日を大切に生きていかないといけないという考えに変わりました。

講演を聞いた日、母に田中さんの話をしました。

普段、授業の話を家ですることは少ないので、その日は私の心の中にある不安な気持ちを誰かに伝

えておきたいという衝動に駆られました。母は、家族が急にいなくなるのは耐えられないと言い、私も同じ気持ちだったので、少しホッとしました。そして、まずは、事故の被害者にもならないよう自分たちの出来ることをしようと約束しました。

も明後日もその先もずっと続くようになると願いながら、「おかえり！」と家族を笑顔で迎えようと思います。

大切な家族の死を受け入れることはとても時間がかかると思います。そして、他の誰かが同じ悲しみを繰り返さないようにと活動をすることは、その度に家族の死と向き合い、当時の記憶が鮮明に蘇るとても苦しい時間だと思います。その苦しみよりも、中学生の私たちに「命の大切さ」を伝えることが重要だという想いから、講演していただいた田中さんの気持ちをしっかりと受け止めないといけないと思いました。毎日交わす「おはよう」「いってきます」「ただいま」という、ごく当たり前の会話も、家族が元気に生きている証なのだと感謝し、今日も明日

【高校生の部】

事実の裏のかけがえのない真実

(岐阜県)

岐阜県立華陽フロンティア高等学校 二年

矢嶋 由乃

らひしひしと伝わってきた。
「敬太は何でも一番乗りが好き。天国へも一番乗りしたんだ。」
この言葉は、毎日一緒に登校していた敬太君のお兄さんがつぶやいたそうだ。事故の日も一緒にいて、目の前で敬太君をはねられてしまったお兄さんの気持ちを想像してたまらない気持ちになつた。その言葉をどんな気持ちで、どんな声でどんな表情で言つたのだろうか。

私たちは、いつも大切なことを見失つてしまふ。たしかに、その存在を知つてゐるはずなのにいつも目をそらしてしまう。その大切なものは、いつだつてそばにあるのに私たちは忘れてしまう。そんな大切なことに改めて気付かされたのは、昨年の「命の大切さを学ぶ教室」を受講したことがきつかけだつた。講師である則竹崇智さんの息子さん敬太君は、当時、流行つていたゲームをしながら運転していたトランクにはねられ亡くなられた。ながら運転の危険、憤り、敬太君への想いが則竹さんの声の温度か

ルールを守らない、軽はずみな行動一つで彼の「これから」を奪われてしまった。敬太君を想う人たちも一生の傷を負わされた。その事実にとても胸が痛くなつた。

私たちはいつも忘れてしまう。毎日、目にする亡くなつてしまつた人の記事や報道には伝えきれない嘆きがあることを。その人にはその人を大切に育て幸せを共有した家族がいて友人がいて大切な人がいた。恋人がいたかもしれない。伴侶がいて子どもがいたかもしれない。夢や大切な約束があつたかもしれない。一つ一つ目にする事実の裏には語りきれないたくさんの人たちの苦しみや悲しみがあつて、これまでの幸せがあつた。そして、当たり前にあると思つていた「これから」があつたのだ。私たちは想像しなければならない。人が亡くなるということは、その人の全てをなくしてしまうということ。事実の裏には胸がつぶれそうになるほどの真実があることを、私たちは想像して思いを馳せなければいけないと思う。想像することは怖いことだ。大切な人

の明日や未来がなくなつてしまふなんて、想像するだけで苦しくなつてしまふ。でも、自分の大切な人が、大切な人の大切な人が何も失わずにいるためには想像する力と考え続けることが大事だと思う。被害者にも加害者にもならないために私はいつも大切なを見失わないようにしたい。毎日、目にする新聞の小さな記事、二分弱の朝のニュース。そこには様々な人の人生があることを、しつかり思いを馳せたい。

講演が終わつても頭から離れない映像がある。敬太君が持つていた水筒は、事故の時つぶれてしまつたそうだ。そのつぶれた水筒をお兄さんは両手で何度ももとに戻そうとしたそうだ。敬太君を想つて、いなくなつてしまつた現実が信じられなくて。見たことのないつぶれた水筒とお兄さんの姿を何度も想像してしまつた。それを語る則竹さんの切なげな声でより苦しくて仕方がなかつた。きっと、この日、聞いたことを思つたことを感じた痛みを一生忘れられないだろうと思つた。

感謝の種

(三重県)

三重県立北星高等学校 四年 杉本 実希

私は中学校の時、不登校でした。クラスに馴染めず、仲の良かった友達ともお互に部活などで忙しくなり、だんだん話す機会が減っていきました。当時の私には友達の話の輪に入ることが出来ませんでした。休み時間に一人で過ごしている私は、楽しそうな友達を見ていると、だんだん自分が惨めに思え、何度も「死にたい」と思うようになりました。学校に行くのが嫌で、朝になるのが怖くて、夜中ずっと一人で泣いていたこともありました。こんな辛い、苦しい思いをするのなら「いのちなんていらない」と思っていました。

担任の勧めもあり、高校は定時制を選びました。合格した当初は、登校しようと思う反面、また行けなくなつたらどうしようという不安で一杯でした。しかし、友達が話しかけてくれて、趣味が合つて、共感してくれた時、心が温かくなりました。ラインに友達の名前が追加された時は、嬉しかったことを覚えています。

二年生の時、いのちの授業で出会ったのが大切な息子さんを交通事故で亡くされた鷺見三重子さんでした。鷺見さんとの出会いによつて、一度は「いらない」と思いつめた「いのち」と再び向き合うことになります。講演の最後に、鷺見さんの活動の一つである人形劇を、「高校生の皆さんで演じてみませんか」と提案されました。講演後、友達と共に鷺見さんの元を訪れ、「やつてみたい」と申し出ました。最初は、友達がやるからという理由でしたが、初めて人形劇の台本に目を通した時は、胸を締め付けられる想いでした。何気ない普段の日常や明るい会話、そして未来が一瞬にして奪われた交通事故。鷺

見さんのご家族の辛さや苦しさ、深い絶望は私の想像を絶するものでした。この事が忘れられてはいけない。誰も被害者にも、加害者にもしてはならない。そして当たり前の日常の大切さ、いのちの重みをこの人形劇を通して伝えていきたいと思うようになりました。

練習を重ね、人形劇の本番を迎える。一回目はショッピングセンター、二回目は高校生が参加する人権交流会、三回目は北星高校の文化祭、四回目は被害者支援のイベント。合計四回を一年間で上演しました。特に印象的だったのは、人権交流会です。

上演後にグループに分かれて他校の生徒たちと交流しました。「感動で涙が出た」「事故の怖さが心に伝わってきた」など、人形劇の感想を直接聞かせてもらえた時には、鷺見さんの人形劇に込めた想いがみんなに伝わったと感じられて、涙が出そうでした。

もし北星高校に入学していなかつたら、もし友達から人形劇に誘われていなかつたら、生きていく意味も見いだせないまま、ただ何となく生きていたとなりたいと思います。

思います。しかし、このボランティアに出会えて、人形劇に取り組むたびに、いのちの大切さを噛み締めます。生きたくても生きられない人っている。「死んでしまつたら誰かが悲しむよ、いのちはお金では買えない大切なものなんだよ」と死にたいと思つていたかつての自分に伝えたりました。その時は、はつとして「これが鷺見さんが伝えたかった『いのちの言葉』なんだ」と気づきました。そして、鷺見さんと息子の拓也さんに「聞こえたよ、いのちの言葉。ありがとうございます」と伝えたいと思うようになりました。

人形劇の最後に、「拓也さんは『しあわせの種』を蒔くために生まれてきた。人にはそれぞれ大切な役割の種がある」というセリフがあります。私の種は何だろうと考えた時、「感謝の種」という言葉が浮かびました。私は私の種を大切に育みながら、これからも家族や友達と過ごす時間のかけがえのなさを噛み締め、感謝の種を蒔くことが出来るようになります。

命の大切さを学ぶ教室

(青森県)

学校法人東奥学園東奥学園高等学校 二年

首藤 紗和

私は小学生の弟がいます。数年前、幼い弟がこたつのコンセントを口の中に入れて誤って食べてしまい、救急車で運ばれたことがあります。脳に電流が流れ、死んでいる可能性もあったと言われました。弟が訳もわからずに大泣きをして、母と救急車で運ばれた時、私は本当に弟が死んでしまうのではないかと感じたことのない大きな不安におそれました。べたつとした汗が体中から出てきて呼吸が浅くなる感覚がありました。今でもあの情景が頭に思い浮かびます。あの時から、弟はコンセントが怖い

と言つて、避けるようになりました。

「命の大切さを学ぶ教室」を受けて、私は命の重さを改めて感じました。運動会や七五三、発表会の写真を見て、尚己くんが純粹な子供であつたことが伝わりました。いつもと同じような朝であつたと思います。事故にあつた尚己くんの姿を静かに話す田代祐子さんが当時どのような気持ちだったのかを想像すると私は胸が締め付けられます。電気ショックによつて、尚己くんの小さい身体が大きく跳ねあがつたこと、口や鼻から血が流れ出ていたこと、数十年前の出来事であるにも関わらず、空気は重くこの間起きた事件のような緊張感がありました。スピードを出し、尚己くんをひいてもブレーキをかけることすらしなかつた加害者を恨まなかつた日はないと思います。加害者だけでなく、日本の法律や理解のない人からの言葉が被害者家族をさらに追い込むこと、私はその事実に衝撃を受けました。目の前で弟がひかれる姿を見て、大人でも受け止めることのできないことを尚己くんの兄は、受け止めなけれ

ばならない状況に迫られたのだと思ひます。田代祐子さんは講義中、私たちに突然「目を閉じて考えてみてほしい」と言いました。そして、家族や友達、恋人、大切な人のことを考えてほしいと言われました。私は顔が熱くなる感覺がしました。どのような人でも、誰かに慕われて大切にされていることがわかりました。生命のメッセージ展のお話をしていただいた時、弱い者として十代から二十代の人達が理不尽に命を奪われていること、心のない言葉に苦しみ、自ら命を絶つ人がいることが、私の思うよりも多かつたことを知りました。命を奪われていい人間なんて一人もいないことを学びました。

田代祐子さんの話を聞き、誰しも人の命を奪う可能性があると同時に奪われる可能性もあるということを考えました。私は通学手段として自転車を使用していますが、曲がり角やアルバイト終わりの暗い道はスピードを落として運転しています。車にひかれないためでもあり、人をひかないためです。私は他者の手によつてこれから未来を奪われたくない

です。私が他者の未来を奪うようなこともしたくありません。また、言葉によつて人を傷つけ、自死を選ぶ人が少しでも減ることを祈っています。そのためにも私はこれから、普段の言葉遣いや接し方を改めようと思いました。一人一人のやさしさや思いやりが、誰かの命を救つて、誰かの行動を引きとめると思います。少しのやさしさで世界は変わめて見え方が変わります。命は一つしかないこと、私は常に胸に刻みながら生きていきます。

犯罪被害者遺族による講演を聴いて

(千葉県)

学校法人安房家政学院千葉県安房西高等学校三年

長田柚里花

私たちが住む日本では、連日、事件に巻き込まれ

て死者が出てしまうような報道が絶えないよう

に感じます。しかし、今までその報道に対し興味を持

つことも、大きく感情が揺さぶられることもほとん

どありませんでした。なぜなら、自分の周りでこの

ようなことが起きるわけがない、自分のいない間に

大切な人が亡くなるわけないと根拠もなく信じてい

ましたし、殺人事件を身近に意識する機会もなく、

「テレビの向こうでの話」としか考えられなかつた

からです。しかし、四月に高校の授業の一環として

「犯罪被害者遺族による講演」を受け、その考えが一変しました。

この講演では、ひつたくりによつて奥様を亡くされた菊池さんのお話を聴きました。菊池さんの奥様は、日頃からひつたくりを警戒していたのにも関わらず、背後から二人乗りのバイクに襲われ、そのまま引きずられ続け、病院に運ばれるも亡くなつてしまつたそうです。菊池さんは、その事件の詳細や犯人の行動、裁判での様子などを事細かくお話してくださいました。

家から外に出かけたら必ず家に帰つてくるという
のが当たり前。しかし、このことが他人によつて覆
された話を伺い、私が日頃、当たり前だと感じられ
ていたことはとても幸せな日常なのだと痛感しまし
た。それと同時に、わが身にも同じことが起つて
もおかしくはないという恐怖を感じました。事件に
巻き込まれて自分が死ぬのではないか、という恐怖
ではありません。私の大切な家族が突然奪われてし
まうのではないかという恐怖です。

「無傷で天国に行かせてあげたかった。」

これは司法解剖後、頭や顔を切り開かれ、包帯にまかれた奥様を見て、菊池さんが発した後悔の言葉です。私は涙を必死にこらえました。その後、奥様との馴れ初めや、奥様の性格など詳しく語る姿を見て、耐え切れずに涙が出ました。幸せな生活を送っていたのにも関わらず、その幸せが加害者によつて一瞬で崩れてしまつたこと、無事に家に帰ることなく亡くなつてしまつたことに、怒りと悲しみでいっぱいになりました。

また、菊池さんは、犯人二人の当時の状況について語られました。犯人の一人は当時十九歳の未成年であり、共犯者から脅される形で犯行を繰り返していました。そのお話の中で、菊池さんは私たちに次の二つことを強く訴えかけてくださいました。

「悪事に誘われても、断る勇気を持つてください。」「本当の親孝行をしてください。」

私はこの言葉を聴いて、近年若者を取り巻く犯いた報道への捉え方が変わりました。

罪、「闇バイト」について考えさせられました。

SNSで仕事内容を明らかにせず、短時間で簡単に高収入が得られる「闇バイト」に応募してしまい知らず知らずのうちに犯罪に加担してしまう若者もいます。その他にも、オンラインゲーム等で知り合い親密な関係になつた後、闇バイトに勧誘するケースが多発しているそうです。親密な関係になつたことにより、断りづらくなつてしまいそのまま闇バイトに手を染める若者が多く存在しています。

しかし、それではいけません。どんなに断りづらかつたとしても、堅実に断らなければ、他人の人生を傷つけ命まで失つてしまふことだつて起こりうるのだと私は思いました。自分でなく、周りの人があなたを傷つけてしまわないように、これ以上菊池さんのような辛い思いをする人を増やさないようにな、この言葉を沢山の人に伝えていきたいと思いました。

「自分には関係のないことだ」

と思うことは無くなり、多くの事件について現実味を帯びて考えられるようになりました。また、今感じている幸せを噛みしめ、悔いの残らないように生きて行きたいとも思える、貴重な経験となりました。

しかし、私の意識が変わっただけでは、守れる命に限りがあります。皆が「誰もが被害者や加害者になり得る」と心に留めておくことで、守れる大切な命も増えるのではないかでしょうか。私がこうして作文を書くことで、誰かの目に留まり、心に留まることで「犯罪のない社会づくり」に少しでも貢献出来れば、講演をしてくださった菊池さんへの恩返しにもなると考えています。

命の尊さ

(新潟県)

新潟県立新潟高等学校 二年 竹淵 壮哉

命はかけがえのない、何より大切なものです。このことは当たり前のことだと思うし、小中学校の道徳の時間で何度も学んだため、自分では理解しているつもりでいました。しかし、「命の大切さを学ぶ教室」で自分の子どもを交通事故で亡くした被害者遺族の方のお話を聞いて、自分の理解は不十分であつたと痛感しました。

お話をしてくださった方のお子さんは、青信号になつてから横断を始め、スピードを出しすぎていたわけでもなく、しっかりと交通ルールを守つていたにも関わらず、トラックに轢かれてしまいました。ト

ラックの運転手は、自分が車内で快適に過ごすための棚を助手席の位置に設置したせいで視界が悪い状態だつたため、左脇を走る自転車に気づかずにそのまま曲がつてしまつたといいます。しかも、過去にそれが原因で注意を受けていたのにも関わらず、再度棚を設置していたのです。私は、ドライバーの身勝手さに憤りを感じると同時に、交通ルールを守つても事故に遭つてしまう可能性があるという恐怖も感じました。講師の方の「ドライバーのことは加害者ではなく、殺人犯だと思っている。到底許せたものではない。」という強い言葉からは、将来の夢に向かつて努力していた未来ある我が子を失ったことへの悔しさと、ドライバーへの強い憎しみを感じました。また、この事故から、真っ当に生きている人たちの命を奪い、その周りの人の心を傷つける、ルールを守らない利己的な人間が一定数はいるのだということを思い知らされました。

「事故の連絡を受けたときは、自分の子供のことだとは思えなかつた。」という言葉から、家族が突

然命を奪われてしまうことの受け入れ難さ、悲しさ、つらさを強く感じました。「事故の当日も普段のようすに家から送り出した我が子と、もう二度と会うことはできない」という言葉からは、普段何気なく接している家族がいることがどれだけ幸せなことかを知り、日頃から家族ともっと話をするようじようと思いました。また、講師の方は、職場の同僚やお子さんの友人からの温かい声がけ、サポートがあつたことで、事故から少しづつではあるけれど立ち直ることができたとも話されていました。もし自分が周りにそのような境遇の人が現れてしまつた時は、温かい声をかけてその人が少しでも前を向いて生きていくための手助けをしたいです。

現在でも、交通事故で人が亡くなつたというニュースは後を断ちません。車の操作を誤つた、飲酒をしていた、信号を無視した、さまざまな原因がありますが、どれも人間の気の緩みから生じるものだと思います。私は、人々が安心して過ごせる社会にするために、誰もが事故を起こしてしまつ可能

性、そして巻き込まれてしまう可能性があるということを常に意識して生活することが大切だと考えます。一人一人がそのような意識を持てば、少なくとも今回のようなドライバーの身勝手さが原因の事故は防げたはずです。全ての人が相手を思いやる心を持ち、自分だけは大丈夫という考えを捨てた安心できる社会になつてほしい、もうこれ以上交通事故で亡くなる人が出てほしくないと思いました。

講演の終わりで話された「一日一日を大切に生きて命を大切にしてほしい」という言葉を受けて、私は交通事故やその他の犯罪に遭わないよう努め、自分や家族、周りの人の幸せを守るために「自分の命は自分で守る」ということを改めて大切にしたいと思いました。

